
葛藤の春

からたちみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葛藤の春

【Nコード】

N0236E

【作者名】

からたちみかん

【あらすじ】

公園のベンチの上で繰り広げられる葛藤劇。春なんて嫌いだ！！

子供の頃、母が皿洗いをしている時に聞こえてくるカチンカチンという音が好きだった。左手の薬指につけていた結婚指輪が皿に当たる音だ。三十回目の春を迎えた私が皿洗いをしても、カチンカチンという音はしない。

未だ独身。

彼氏もなく。

「うん」

唸り声を上げてかざした手はそれにしても色気もないぽっちゃりとした指だ。しかも指輪などという洒落たものはしていない。ましてや結婚指輪というものの存在は程遠い。

「結婚した〜い」

「彼氏もないのに？」

何が悲しくてこんなことやっているのだろうか？ 空を見上げる。

春特有の霞んだ青い空と薄紅色の桜は、可もなく不可もなくぼんやりとした風景の中に溶け込んでいた。

そんな中真つ昼間の公園でベンチを陣取って缶ビールを飲んでいく。

まったくもっていい御身分だ。

「そこからはじめなければいけないのはわかっていますけど。皿洗うときにカチンカチンって音がしないんだよ。三十過ぎてだよ？ 虚しくねえ？ そう思ったら急に結婚願望沸いちゃったの！」

叫ぶように言った声も曖昧な景色の中に吸い込まれていく。通りますぐりのサラリーマンが怪訝な顔している。

「彼氏いない歴と年齢が一緒なんだよ！？ 見事なまでに男経験少ないうえに男嫌いなあたしが結婚したいって言ってるんだよ！？」

「まあ、落ちつけや」

冷静に突っ込んだ声も言葉もおぼろげな青い空にかき消されてゆく。

「お主の奥手にも困ったものよ。やっぱりあのときの男を無理矢理にでも押さえておけばよかったものを」

「だって、えっちしたとたんにさめちゃったんだもん。しゃーないやんけ」

なぜかエセ臭く関西弁になってしまう。

かつて好きだった人のことを思い出す。

子宮が燃え上がるような恋をしたことがあった。ベタにバレンタインデーにラブレターを仕込んだっけ。答えは『付き合えません』玉碎だった。けれども好きで追っかけていた時は楽しかった。

あぐく押し倒して奪われた処女ならぬ、奪った童貞ときたもんだ。年下だったからなあ。

好きだったという強烈な想いは確かにいい思い出。何が悲しいかといえば童貞を奪ったとたんにその情熱が失せたことである。

ああ、セックスなんてこんなものか。

まるで不感症みたいだな。

こんな冷静になってしまつては発展するものもしない。幻滅してしまつたというのならどれだけ自分は理想が高いのか。

結局付き合うまでには至らないうちに『もう会つのはよそう』とメールがきたのだから二度フラれたことになる。そんな汚点を残すことに耐えられなかった若かりし日の自分は『恋人ごっこはもう終わり』返信して、履歴も電話番号もメールアドレスも削除した。なかったことにしたかったクセにその傷から立ち直ることもなく以来現実的な部分で好きな人すら出来やしない。

「六年前の傷！！ そんなに抉んなくてもいいじゃんか！！」

「自分で抉ってるんでしょ！！」

「そうだけどさあ」

春なんて嫌いだ。何が悲しくて春にフラれなきゃならんだ。

そもそもだ。何で春が巡ってくる度に男嫌いだと自覚して凹まなくてはならないのか。眺めているだけなら好きな人もいるけれど（偶像の領域）いざ触れるような位置にくると鳥肌が立つのだから体は正直なものだ。

「はあ……」

ため息ひとつ。

それにしても生暖かい。マツタリとしすぎている。眠いし、だるいしで体の調子まで狂ってしまう。

缶ビールを煽りながら桜を見上げる。

「桜ってさ、確かにこうやって見ていてキレイだとは思っのよ。でもさ、想像やらテレビで見ている方がキレイだよ。実際に見るとこんなもんかって気分になるのよねえ」

「ま、現実なんてそんなものでしょ？ 男と同じ。妄想に恋しているのと現実の結婚は違うということ」

考えただけでリアルに切なくなる。

「夢見せてよおおおおお」

「夜見なさい」

「……（泣）」

「まずは向き合うことからはじめないと」

「わかつちやいるけどねえ」

やめられない。

スーダラ節が脳裏を駆け巡る。無責任男ならぬ無責任女は現実を見ようともしない。

中途半端な自分。それが嫌なのに三十回目の春を迎えても抜け出せない。

「それにしてもさ。三十回目の春っていうと少ないような気がするない？」

「確かに」

「そう考えると季節の巡りなんてどうがんばっても三桁に達する程度しか体験できないんだよね」

「もったいないよね」

いわれてみればそうだ。

「年取ると時間の流れは速く感じるようになるけどたかだか三十回だと思うとまだまだやれちゃう気分にならない？」

「そっか。そうだよな」

しみじみと呟いた。

「まだまだ若輩者じゃん」

「元気があれば何でも出来ちゃう？」

「あはは」

某有名な格闘家の言葉を思い出して笑った。一発ぶん殴ってもらったらさぞかし迷いなんて吹き飛びそうだ。

「痛みで飛ぶよね」

「痛いときなんて大概のこと忘れるよね」

「あれだ、暇だと無駄なこと考えるけど忙しい時はそんなの考えている余裕無い」

「まあね。忙しいっていう字は『心』を『亡くす』って書くわけじゃん？ あんまり好きじゃないんだよね。仕事やプライベートで忙しい時はある種の達成感あるんだから心を亡くしているってことはないと思うし。そういう時ほど色々やっているよね」

「むしろ忙しいという単語を使うと時って面倒くさい時だよな」

「そうそう。忙しいのでまた今度お茶しましょうね。ってヤツ？」

「その通り！」

自分でも使用しているのだから人を責めるのはおこがましい話。

「自分にとってどうでもいい人間がいるということはその人にとっで自分がどうでもいい人間であることもあるわけなんだから」

「そうそう。人に嫌われなくなければ誰も嫌いにならなければいいのという皮肉です」

皮肉を込めて笑いながら缶ビールを傾ける。もうカラだ。仕方なくもう一本空けた。どんだけ呑んだくれる気だ？

「そうだ、そろそろ投稿用の小説かなきゃないんだけどネタどうす

る？」

「コレでいいんじゃない？」

「マジこれでいいの？」

程よくふわふとした気分になってくる。ああ、世界が回る。

「ジャンルはどうする？」

「恋愛じゃないことは確かだね」

「面倒くさいから現代小説でいいじゃん」

「いいよね？」

相槌を打ってぐびぐびと缶ビールを飲む。ピッチが上がっていく。

「最後のシメは『もう一度、春を愛することからはじめよう』で、いいじゃん。いかにもつぼくて」

「そうそう、荒波と葛藤を乗り越えて踏みにじるように春を愛しようじゃないか。」

「んねー」

近くにいた公園の主と目があって笑い転げた。主はぼかんとした顔であたしを見ている。

そりやそうだろう。さっきからずっと独り言でブツクサやっていればサラリーマンも公演の主も不審がること間違えない。

「かんぱーい」

あたしは霞んだ空と薄紅の桜に杯を上げてビールを飲み干した。

もう一度、春を愛することからはじめるために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0236e/>

葛藤の春

2010年10月8日15時55分発行